



与謝燕村《富嶽列松図》



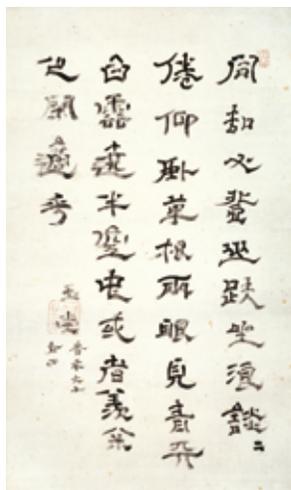
浦上玉堂《山紅於染圖》



浦上玉堂《秋色半分图》



浦上玉堂《醉雲醒月图》



浦上玉堂《隸體章句》



浦上玉堂《深山渡橋图》

木村定三コレクション追想

古田 浩俊

はじめに

月日の過ぎ行くのは早いもので、木村定三氏が亡くなられてからもう18年が経つ。この間、氏のコレクションの愛知県美術館への受け入れやその後の調査研究等に携わってきた何人もの上司や同僚が退職してしまった。生前の木村氏と面識があったのは、いまや筆者と深山副館長だけとなり、筆者は受け入れの実務を最初から最後まで担当した経験を持つ唯一の学芸員となってしまった。そこで記憶と記録を頼りに、2000（平成12）年から2009（平成21）年までの10年間の状況について書き残しておくこととする。

はじめの面会

2000（平成12）年4月13日、一本の電話が美術館に入った。電話の主は木村定三氏。作品を預けるから取りに来てもらいたいという内容である。電話を取った上司の美術課長から同行するよう声をかけられた筆者は、どこに行くのかもわからぬままライトバン（公用車）のハンドルを握った¹。筆者はその時、木村定三氏についての知識は皆無。名前すら聞いたことがないといった状況であった。美術館から北に向かう一本道を5分ほど走ると、東区主税町のお宅に到着する。毎年長者番付に載る人だという話を車中で聞かされた筆者は、どんな豪邸に行かされるのかと思いきや、外から見るとごくありふれた普通のお住まいである²。玄関を入ると、左手の小さな部屋に通された。今思うと、美保子夫人に出迎えられて案内されたはずなのだが、夫人との初めての出会いについてはっきりとした記憶はない。通された小部屋の壁の上の方には、高額納税の感謝状がぐるりと取り巻く。なるほど、長者番付に毎年載るというのも納得である。壁には本がぎっしりと詰まった書棚が並んでいる。多くは美術関係のものだ³。電話の主はなかなか現れない。そのうちに奥様がお茶と和菓子を持って来られる。後に、美術館がたいへんお世話になる美保子夫人である。役割を終えると、しずしずと引き下がられた。この時はまだ、美保子夫人はご亭主の奥さんとしての黒衣に徹しておられた。和菓子には爪楊枝ではなく、木の板を切ってナイ

1 愛知芸術文化センターの公用車には普通車が使われており、パワーステアリングがなくてハンドルは重かったが後部座席を倒すとかなりの量の荷物が積めた。

2 木村氏のお宅があった場所には現在高層マンションが建ち、当時の面影はまったく残っていない。

3 木村定三氏旧蔵の書籍は、愛知芸術文化センターアートライブラリーに所蔵されている。愛知芸術文化センターアートライブラリー編「蔵書目録」『木村定三コレクション研究報告書 2 2007』2008年、愛知県美術館、43-72頁。

フのようにしたもの（黒文字）が付いてきて驚かされた。恥ずかしながら筆者が初めて使うしろもの。さすがにお金持ちは違うと感心する。それらをおいしくいただき、またしばらく待たされる。来ているのはわかっているのに何ですぐにお出ましにならないのだろうか、身支度到手間取っているのだろうか、「しきたり」をまだ知らなかった筆者は単純にそう思った。やがておもむろに木村氏が現れた。お待たせしましたとか、待たせた理由の言葉などは一切ない。そういうことも「しきたり」の一部であることを筆者が知るのは、ずっと後のことである。痩せ型でセルロイド眼鏡をかけた普通のご老人ではあるが、身だしなみはきちんとしていて隙がない。褐色のシャツもピシッとしていて、撫れたり曲がったりしているところがない。床屋に行ったばかりのように整髪している。そこらへんが普通のご隠居さんとはちょっと違う。品格が漂っているのである。課長が筆者を紹介してくれたかどうか定かではない。その時の木村氏の反応とかの記憶がまったくないので、おそらく紹介はなかったのであろう。木村氏は本題にはすぐに入らず、円空やピカソの話をしばらくされる。彼らはいかに偉かったかという内容だったと思う。整髪していても直すところなどないのに、木村氏が耳の上あたりの髪の毛をしきりに触っていたことが記憶に残る。木村氏と旧知の課長がもっぱら話し相手となり、私は隣でひたすら耳を傾けるだけ。初対面の私ごときの若輩がとでも口を挟めるような雰囲気ではなかった。木村氏と目が合った記憶がないので、おそらく氏の眼中には課長しか映っておらず、筆者と一緒に来た業者くらいにしか見えていなかったのであろう。車に積んだのは、須田剋太《東大寺》（KT007、図1）、《東大寺落慶供養》（KT008、図2）、《遊女之図》（KT009、図3）、《鏡獅子》（KT010、図4）の4点。横井礼以《三つ面》（KT011、図5）までは積み重なったようで、4月21日に改めて受け取りに行くことになる。これらの作品に共通しているのは、一人で扱うには大きすぎるといふ点である。作品を積んだ帰り道、円空やピカソについては以前にも聞いた話だと課長は言う。こうして運んできた作品は、当時すでに木村氏から寄託を受けていた6点の作品に追加された。この日の出来事は、筆者個人にとっては木村定三氏や美保子夫人との最初の出会いであり、美術館にとっては木村氏のコレクションを自前で運ぶ最初になるわけだが⁴、その時には美術館にやがて「木村定三コレクション」が形成されることになることになると想像した学芸員は、当事者たちを含めおそらく誰もいなかった。

4 木村定三コレクションのほとんどは、筆者が運転する公用車で運ばれることになる。



図1



図2



図3



図4



図5

1992（平成4）年～

小川芋銭展

愛知県美術館が木村定三氏と接点を持ったのは1993(平成5)年に開催した小川芋銭展⁵の準備をしていた時期に遡る。開催の前年には浅野徹館長と担当の学芸員2人が、共催者の東京国立近代美術館の次長や担当学芸員、日本経済新聞社の担当者と6人でお宅を訪問している⁶。日経新聞は作品を木村氏からお借りすることなどを通じて、これ以前から木村氏とは懇意だったようだ。この展覧会では、全出品作の約4分の1にあたる21点が木村氏のコレクションであった。しかし展覧会のカタログには、木村氏の氏名は作品の所有者の部分のもとより、謝辞にすら記載されていない⁷。こんなところに匿名のコレクターを貫く木村氏の姿勢がみられる。

この展覧会の後に、当館は芋銭の《沼四題》4点(KT001～4、図6)の寄託を受けることになる。それらは1992年に開館した新美術館にとっては最初の寄託作品となった。その後、木村氏は美保子夫人とともに企画展のオープニングにしばしば来館してくれていたようだ。展覧会の感想をお聞きすると、たいがい「くだらない」とおっしゃっていたと、

5 会期：1996年6月4日～7月4日、主催：愛知県美術館、東京国立近代美術館、日本経済新聞社、担当学芸員：牧野研一郎、深山孝彰

6 筆者も経験していない最初期の経緯については、以下に詳しい。牧野研一郎「木村定三コレクション覚書」『木村定三コレクション選』愛知県美術館／(財)愛知県文化振興事業団、2003年、9頁。上記覚書では人数に入られていないが、深山副館長は当時担当学芸員の一人としてこの場に同席していたという。この時木村氏からは「芸術家の評価は打率ではなく場外ホームランの本数で決まる」といった話も聞いたと回想している。

7 『小川芋銭展』日本経済新聞社、1993年。

後に上司から聞いたことがある⁸。随分と手厳しかったようだ。かくして、お顔を拝見しても館長と芋銭展の担当学芸員以外は木村氏とわかる館員はいなかった。当時はまだ限られた個人のレベルでの接点しかなかった。



図6

その後、1996（平成8）年には前田青邨の《朝鮮五題》のうちで木村氏ご所蔵の2点（KT005~6、図7）が追加で寄託され、この時点で計6点を寄託品として木村氏からお預かりしていたことになる。寄託の契約期間は2年間なので、2年ごとに更新手続きをしていただく必要があったが、書類だけのやりとりだけで済んだので、わざわざお会いする必要はなかった。これら寄託品に共通するのは横長の大幅という点である。ご自宅で掛けるのが大変だから預けたというような話を後々耳にした。そうした状況の中、2000（平成12）年4月に前述の電話が入ったのである。



図7

2001~02（平成13~14）年

木村氏からの寄贈 その1

翌2001（平成13）年12月10日に木村氏からまた電話が入り、今回は学芸員室に大きな衝撃が走った。なんと寄託している作品11点すべてを寄贈するとの申し出である。木村氏が寄託品を寄贈してくださることになるなどと誰が想定できたであろうか。美術館の作品購入が原則凍結されていた時期で⁹、収集委員会に諮問するのはさほど値の張らない寄贈作品ばかりだったので、当時収集を担当していた筆者は、通常予算枠ではとても購入できないような素晴らしい作品群をいただけるということに歓喜した。この年度の美術品収集

8 深山副館長によれば、1995（平成7）年開催の「アンドリュー・ワイエス展」の折には、「静のワイエス」と「動の須田勉太」の二人展というのほどかと話されていたという。木村氏はワイエスを高く評価されていたようで、コレクションの中にはワイエスの複製版画やポスター等が4点（M2570~73）含まれている。

9 購入の凍結は1999（平成11）年度から始まり、2001（平成13）年度までの3年間に及んだ。2001年度は凍結中ではあったが平成11年度第1回収集委員会（平成12年1月24日開催）で承認されながら購入できないままだった7点のうちの3点の購入が認められた。

委員会は11月末にすでに開催済みであったが、木村氏のご高齢で迅速な処理を希望されているという理由により、木村氏からの11点の寄贈案件だけで第2回収集委員会を持ち回りで開催した。筆者はすべての調書を作成し、何人かの収集委員に説明に伺い、委員長には各委員の意見を伝えたくうえで、最終的に受け入れの承認をいただいた。

一方で、二代目の長谷川三郎館長と美術課長が木村氏と何度か面談をする中で、木村氏が所蔵する主要な作品を美術館がお預かりすること、それらの作品を順次寄託あるいは寄贈していただくことなどが取り決められた¹⁰。3件6点の重要文化財（M2890～95、図8～10、カラー図版6～8頁）については、年が明けた2月20日から寄託していただいた¹¹。重文のうち与謝蕪村《富嶽列松図》だけは、木村氏自らが入手したものではなく、父の定治郎氏の遺品である。木村氏のご子息から聞いた話では、木村氏はこの作品のことを「まぐれ当たりの大ホームラン」と言っていたとのこと。このことから、木村氏は父親のコレクションに関してかなり厳しい評価をしていたものと推測される。



図8

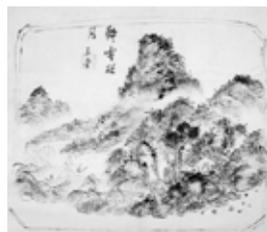
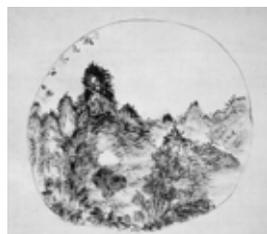


図9



図10

10 牧野、前掲覚書、同頁。

11 変更年月日を平成14年2月20日として、所有者である木村氏から文化庁長官宛てに「所在場所変更届」が提出されている。

衝撃の電話の2週間後には作品の受け渡しが始まり、それは2002（平成14）年の11月までの約1年間で17回を数えた¹²。受け渡しに際しては、作家・作品名を書き取ってのリスト化、記録写真の撮影、リストと作品が照合できるように作品に仮番号を付与するといった作業を伴った。受け渡しはいつも2階の客間で行われた¹³。部屋の片隅には愛嬌のあるアフリカ彫刻のライオン像（M619、



図11

図11) が鎮座しており、その微笑ましい表情には、厳しさばかりが伝えられてきたきらいのあった木村氏の別の側面を垣間見た気がした。

お宅にお邪魔するまでは、当日に何がどれくらい渡されるのかわからない。出された作品の梱包を解き、中身を確認して1から番号札を付ける。軸物であれば、紐を解いて床の間に掛ける。デジカメで写真を撮って、持参した便箋に作家名と作品名を記す。それらの情報は箱書きや、箱を包む風呂敷の片隅に木村氏が記したものを書き写した。こうしてその日に預かった作品のリストは、木村家にもお渡しするために、当初は木村家からすぐ近くの桑原商店でコピーをとっていた¹⁴。やがてカーボン紙を挟んで下の紙に写すことにし、その後はデータを美術館でエクセル入力したものを次回に持参するようになっていった。

2001（平成13）年12月末から始まった受け渡しの最初の頃は木村氏もまだお元気で、1年後に他界されてしまうなどということ誰が予測できたであろうか。愛蔵品を引き渡す際には、その作品に寄せる思いなどを語ってくれていた。筆者の記憶に残るのは、2002（平成14）年1月31日、小川芋銭の作品を受け取りに行ったときのこと。床の間に掛けた《暁山雲》（KT016、図12）の中に人の顔が描かれているが、どこか言いなさいという問題が我々に出された。木村氏は、出品交渉などに訪れた学芸員や研究者にこうした質問をすることは、関係者にはよく知られていた。かつて同じ問題が出された場に居合わせていた経験のある上司の課長が正解を答えて、筆者はほっとしたという経験である¹⁵。



図12

12 牧野、前掲覚書、同頁。17回の詳細については、当時の資料が残されていないため、断片的にしかわからない。

13 木村家の倉や客間の写真は以下を参照のこと。『木村定三コレクション研究報告書 2』愛知県美術館、2008年、16頁。美保子夫人に写真をお借りした際、家を新築した際に建築屋さんか撮ってくれたものとおっしゃっていた。それゆえに写真の客間にはまだ何も飾られていない。

14 2017（平成29）年度に桑原商店の店主の奥様桑原幸子氏から須田昶太の油彩画《向日葵》をご寄贈いただくことになる。この作品は店主の正二氏が木村氏の勧めで購入したもので、正二氏が亡くなったため幸子氏がこの作品の処分について、親しくしていた美保子夫人に相談された結果、愛知県美術館に寄贈されることとなった。16年という時を経てはいても、筆者は不思議な縁を感じずにはいられなかった。

15 この時の経験について、筆者はすでに触れている。拙稿「木村定三コレクション研究 I — 「鵬」をめぐる—」『木村定三コレクション研究報告書 2 2007』2008年、愛知県美術館、23頁。深山副館長によれば、前述の1992年に小川芋銭展の出品依頼で訪問した際には、この作品からの質問に加えて《紆泉道人洗面之池》（KT17）の中に「たいへんな美女がおる」という出題もあったという。

もう一つは、5月7日に長谷川利行の作品をお預かりしたときのことである。木村氏は《ノアノアの少女》(KT122、図13)を引き渡す際に、この作品をあげるからこの絵のモデルとなった少女の行く末について調べてもらいたいと上司の課長に依頼された¹⁶。その時、筆者は直感的に無理だろうと思った。それでも自分なりに少しは調べようとしかけたものの、あまりにも時が経ちすぎており、やはり全くのお手上げであった。かくして木村氏が長年気になさっていたことにお答えをして安心させてあげることは、残念ながら氏の生前にはできなかった。



図13

7月17日の輸送は専門業者をお願いした。2階からたいへん重い北魏の石仏(KT140、図14)を降ろさなくてはならなかったからで、学芸員だけではとても手に負えない代物だった。重い石仏を人力のみで階段から降ろすのは実際とても困難で、百戦錬磨の業者をもってしても急な階段を降ろすのは結構たいへんな作業だった。この日は他にも《虎に乗る童女像》(KT131、図15)をはじめとするたくさんの石造彫刻や東南アジアの大きな仏像《如来坐像》(KT139、図16)、日本の《不動明王立像》(図17)など、重かったり大きかったりして学芸員だけでは手に負えない作品を運んだ。



図14



図15



図16



図17

大幅の曼荼羅(KT138、図18)が引き渡されたのはわりと早い時期だったと記憶していたが、2月11日という記録があった。画面が真っ黒で、かろうじて曼荼羅と判別できるほどの状態であった。筆者はこの年2002(平成14)年11月に京都国立博物館で開催された指定文化財企画・展示セミナーに参加しており、そのセミナーの講師の一人が曼荼羅に関する著書もある文化庁の調査官林温氏だったので、曼荼羅をカラープリントした画像を見ていただいたが、さすがに真っ黒すぎて意見を聴取するまでには至らなかった。その後、デジタル画像をお送りしたりもしたが、結果は同じであった¹⁷。このセ



図18

16 課長本人も後にこの件に関して触れている。牧野、前掲覚書、11頁。

17 その後、美保子夫人から寄贈作品を受け入れている際、この曼荼羅と対になると思われる一幅(M2123)が見つかり、調査の結果、木村氏寄贈の真っ黒だった曼荼羅は種子両界曼荼羅の胎藏界であることが判明した。これら一具の曼荼羅のカラー図版と解説は以下に収録されている。深山孝彰、平井啓修編『仏教美術 木村定三コレクション』愛知県美術館、2013年、No104。

ミナーの際には、東南アジアの仏像に造詣が深い京都国立博物館の浅湫毅氏に東南アジアの仏像《如来坐像》(図16)についての所見を聞いたりもした。

11月8日の平成14年度第1回収集委員会に諮問し承認された作品は、近代美術では小川芋銭19点、尾崎良二13点、香月泰男20点、熊谷守一50点、須田剋太8点、長谷川利行5点、近世絵画では与謝蕪村の指定品以外の《若竹図》(M130、図19)《紫陽花にほととぎす図》(M129、図20)など4点、《不動明王立像》(KT143、図17)などの仏像や仏画16点、考古工芸資料158箱である¹⁸。筆者はこれら作品の受け渡しのすべてに立ち会ったが、木村家を訪れるたび、お預かりする作品がじつに広範多岐にわたることに驚愕したものである。



図19



図20

収集委員会にあたり、当館の学芸員の専門外の分野の一部に関して特別評価員として専門家に見ていただいた。3 軀の北魏石仏は課長の学友で北魏の仏像を専門にする石松日奈子氏に所見をいただき、時代や制作地についての知見が得られた。また、考古工芸資料については、伝手はなかったが古代中国の考古学が専門の京都大学人文科学研究所の岡村秀典助教授に見ていただき、玉琮ぎょくそうに見るべきものがあることが判明した (KT147、図21)。これらは、現在も続けられている外部の専門家による調査の始まりとなった。



図21

記憶に残る木村氏の言葉

木村氏が話されている中で、文字にして残しておくべきと思うのは、木村氏がコレクションを始めた時期についてと、なぜコレクションをするようになったかという点である。コレクションを始めたのは名古屋に戻ってからですかという課長の質問に対し、それを否定された後に「学生時代から」とはっきりおっしゃられたのを覚えている。木村氏が東京帝国大学法学部政治学科を卒業して名古屋に戻るのは1936 (昭和11) 年なので、それ以前からコレクションを始めていたということになる。また、コレクションを始めた理由については、兄弟がどんどんと死んでいってしまい…ということをおっしゃっており、それがコレクションをすることとどう結びつくのかその時にはよく理解できなかった。筆者なりの解釈をすれば、兄弟にどんどんと先立たれていった木村氏にとって一番重要なことは兄弟たちの分まで「生きる」ということだったと思われる。それが残された者の使命であった。

18 指定品については、文化庁の登録美術品制度をお勧めして、「登録美術品」として愛知県美術館が寄託を受けることになる。

その「生きる」という使命を果たすために木村氏が選んだ手段がコレクションすることであった。つまり木村氏にとってコレクションするということと生きるということとは同義であった。だとすれば、コレクションするという行為には、木村氏の個人的な鎮魂の思いといったものが通底していたと考えられる。

そうした目で作品群を眺めてみよう。香月泰男や浜田知明の作品は、意識的に収集されたように思われる。ここで意識的という言葉を使ったのは、二人の作風が木村氏のテイストに必ずしも合致しているとは思えないからである。二人に共通するのはシベリア抑留の経験を持つということである。ひょっとすると木村氏の近親者で同じような経験をした人がいたのかもしれない。少なくとも香月も浜田もいつ死んでもおかしくないような状況から「生き延びてきた」という点で、木村氏には共感するところがあったはずである。

また、コレクションの中には宗教関係とりわけ仏像をはじめとする仏教美術に関わる作品が数多い。密教法具はある程度まとまった塊としてあり、厨子もどうしてこんなにあるのかというくらいに数がある。このあたり、身内に先立たれていったということと関係があるように思えてならない。

登録美術品

1998(平成10)年に施行された登録美術品制度は、重要文化財や国宝、その他、世界的に優れた美術品を国が登録し、登録した美術品を公開契約した美術館で公開するというものである。相続が発生した場合、普通美術品の場合の物納の順位は第3順位だが、登録美術品だと不動産や国債などと同じ第1順位で物納することが可能となるというのが所蔵者にとってのメリットであった。

どういう経緯で木村氏ご所蔵の重要文化財を登録美術品にさせていただいたのかは、記憶が定かではないが、課長や主任学芸員、主任学芸員と旧知の文化庁の岡部幹彦氏とともに木村氏の近親者たちにこの制度について説明しながら登録美術品にしてくれるようお願いした場に居合わせたことを覚えている。この制度を使うと、所蔵者は美術館との公開契約を5年間は解約できないため、その間美術館は登録美術品を展示できるというメリットがあるのだが、寄託品であれば展示もできるので、わざわざ登録美術品にしてみようというメリットは美術館にはあまりない。しかも物納されると作品は国の所有となってしまう、愛知県美術館がコントロールできなくなるというデメリットもあった。むしろ所蔵家が亡くなった時に物納できるという所蔵者のメリットを強調したのかもしれない。重要文化財が登録美術品になる最初のケースだったので、文化庁としても力が入っていたようだ。

3件6点の重要文化財が登録美術品になった場合、3か月以内に愛知県美術館は木村氏と公開契約を締結し、当美術館で公開することを同意するという内容の「登録美術品公開契約に関する同意書」を2002(平成14)年2月20日に愛知県美術館は木村定三氏に提出した。

木村氏からは、3月13日付けで文化庁への登録美術品の申請をしていただき、5月17日付けで木村氏宛てに「登録通知書」が届き、3件6点の重要文化財が晴れて登録美術品と

なった¹⁹。そして同月23日に木村氏と愛知県美術館は、重要文化財3件6点について「登録美術品公開契約書」を締結した。これにより愛知県美術館は文化庁に提出した「公開等計画届出書」に則って登録美術品を、契約の期間の5年間にわたって公開していくこととなった。

美術館では、登録美術品となったのを記念して、さっそく6月25日から7月14日にかけてこれら6点をコレクション展示室7で特別公開した²⁰（図22）。

やがて木村定三氏が亡くなれると、美術品は美保子夫人が相続された。しかし相続税を物納する必要はなかった。登録美術品を物納することよりも、遺品が一つの場所に留まることの方を優先し、3件の重要文化財は結果的に登録美術品から登録を抹消して、愛知県美術館に寄贈されることになる。登録美術品制度は、相続の際に優れた作品を相続したけれど現金や有価証券はほとんどないといったような人にとってはありがたい制度かもしれないが、それなりの資産を相続した人にとっては、登録美術品を国に所有してもらいたいという希望でもない限りメリットがないということが露呈した結果ともなった。



図22

木村氏からの寄贈 その2

作品の受け渡しを進める中、10月29日付けで木村氏から自分が愛知県美術館に預けた作品と今後引き渡す作品をすべて寄贈するという内容の寄贈申込書をいただくことになる。この頃には木村氏はすでに体調を悪くしており、作品の受け渡しも近親者たちにまかせるようになっていたと記憶する。木村氏は当初、良い作品は寄贈する、その他の作品は寄託するとおっしゃっていた。美術館としては手続きのこともあり、お預かりした個々の作品が寄贈と寄託のどちらなのかを知りかった。この点についてご子息を通じて聞いていただいても、これも良い、あれも良いという返事だったらしく、本人も仕分けることが難しいような状況であった。そんな中、後に「木村定三コレクション」と呼ばれることになる作品に対して寄贈が申し込まれたわけである。この申込み後、木村氏がお亡くなりになるま

19 登録番号13：与謝蕪村《富嶽列松図》、同14：浦上玉堂《山紅於染図》、同15（1）：同《秋色半分図》、同15（2）：同《酔雲醒月図》、同15（3）：同《山水図》、同15（4）：同《五言絶句》。現在は登録美術品ではないが、登録美術品であった記録は残されている。https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/torokubijutsuseido/toroku_jokyo.html

20 『2002年度版 愛知県美術館 年報』によれば、2002年度第I期前期（4月26日～7月14日）の展示室7は「愛知の日本画」となっており、この特別公開の記録は出てこないが、会期半ばの6月24日（月）の休館日に展示替えをして特別公開したということが別の記録から判明した。写真記録によれば、登録美術品制度の紹介パネルも掲示されており、まさに登録美術品となったことを記念しての展示公開であった。

でに受け渡された作品は、熊谷守一の書や水彩画など21点（10月29日搬入）²¹、エクアドルの壺など7点（11月6日搬入）²²、考古工芸資料が12箱（11月6日搬入）である²³。11月8日に開催した平成14年度第1回収集委員会で、木村定三コレクションの将来的な受け入れについてもすでに承認されていたので、これらの作品については、委員会を経ずに受け入れ手続きを行った。木村定三氏からご寄贈いただいた作品は、最終的に333件にのぼった。

この間に自著『熊谷守一撰集』も1冊ご寄贈いただいた。箱には「愛知県美術館寄贈」と墨書きされており、木村氏のこの本に対する熱い思いが伝わってきた。その本をいただいた時だと思うが、この本に掲載されているすべての作品をお持ちなのかという上司の質問に対して、謙遜気味に、きっぱりと否定なさったことを覚えている²⁴。

2003（平成15）年

木村定三氏の他界と「時の贈りもの」展

これら木村氏からご寄贈いただいた作品で、翌2003（平成15）年の3月に木村定三コレクション展の開催を準備していた。1月14日にご子息から副館長にかかってきた電話によると、木村氏は国立名古屋病院に入院中しているとのこと²⁵。その後、筆者はご子息から24日に電話を受けた。21日に木村氏が亡くなられたこと、近親者で葬儀を行ったこと、香典等は辞退することが伝えられた²⁶。残念ながら、木村氏に自身が寄贈した作品の展覧会を見てもらうことはできなかった。

美術館では3月1日から「時の贈りもの 木村定三コレクション」を開催し、これが木村定三コレクションによる最初の展覧会となった。展示室入口には木村家の2階客間の床の間に置かれていた石像の獅子像（KT136、137）²⁷に挟まれるように、木村氏の写真パネルと自筆の座右銘「傍若有人 傍若在佛」を掲げた（図23）。作品点数としては熊谷守一が49点と圧倒的に多く、小川芋銭22点、香月泰男20点、須田剋太12点、尾崎良二10点、長谷川利行5点、浦上玉堂5点、与謝蕪村4点、その他仏像6点や玉琮2点と青銅器1点



図23

- 21 KT324~344：【素描】普賢菩薩、千手観音、【書】すずめ、からす、いろは哥、かみさま、ほとけさま、【日本画】牛、白兔、雨滴、虎、蝸牛、鴨跖草、眠猫、塾柿、鯉、河童、蕺草に虻、機織虫、蒲公英に蝦蟆、蝦蟆に蟻
- 22 KT317~323
- 23 KT305~316
- 24 後に美保子夫人からの寄贈を受けてわかることだが、この時の木村氏の言葉には偽りはなく、掲載された作品で木村氏がこのとき所蔵していたのは半分強に過ぎなかった。
- 25 牧野、前掲覚書、9頁。
- 26 作品を受け取りに行ったある日、送られてきた香典は送り返しているという話を美保子夫人からお聞きした。
- 27 これらの像は作品の受け渡しに関わった学芸員には馴染み深い作品である。もともと1体しかなかったが、対になる作品を探してもらったということの木村氏は話されていた。

を展示した²⁸。重文指定品を除けば、この展覧会で核を成していたのは、熊谷守一と小川芋銭であった。木村氏はこの2作家のコレクターとして、美術界ではある程度知られていた。とはいえ、木村氏旧蔵の両作家の作品をこれだけまとめて見ることはこれが初めてであった。この展覧会の意義は、木村氏「本人」からの寄贈作品による展覧会であったという点である。換言すれば、そこに展示された作品は、基本的に木村氏本人が良い作品と認めたものから構成されていたのである。

この展覧会は企画展示室で開催されたが、企画展ではなく所蔵作品展の枠組みの中で行われた。それ故に、展覧会カタログは制作されなかったが、その代わりに『木村定三コレクション選』を刊行し、これは木村定三コレクションを紹介する最初の刊行物となった²⁹。

美保子夫人からの寄贈

木村定三氏没後、残されたコレクションは美保子夫人が相続された。コレクションを分散させたくないという故人の遺志を継いだ夫人は、登録美術品であった重要文化財3件も含め、そのすべてを愛知県美術館に寄贈することとなる。

「時の贈りもの」展開幕4日後の3月5日から作品の受け渡しが始まり、9月11日までの約半年の間に計32回、2,914点を移送した。平均すると1回当たり100点近く運んだ計算になる。すでに搬入されていた重文指定品6点を含めると、2003（平成15）年度には美保子夫人から2,920点のご寄贈をいただいたことになる。ご遺族の立会いの下、受け渡しは通常2階の客間で行われたが、時には3棟ある倉から直接運び出すこともあった³⁰。

のちの調査で貴重な作品であることが判明した作品の受け入れ状況について記しておく。《高麗鉄地金銀象嵌鏡架》(M1027、図24)は、受け入れ後の調査を通じて価値が見出された筆頭といえる³¹。5月8日に受け入れた105点の作品の一つで、密教法具や経巻・経筒、仏像や神像などと一緒に受け渡された。この作品だけは重くて客間に運べなかったらしく、この日の最後の作品として蔵の中からの直接搬出となった。ガラスの蓋の付いた木箱に入っていた物は赤錆に覆われており、元の形状は折り畳み式の椅子のようであった。ところが箱にも風呂敷にもこれが何であるのか何の記載もない。それでも何らかの名称を付けないと、木村家にお渡しするリストに記載ができない。筆者は武將などが戦場で使った折り畳み式の椅子なのではないかと想像し、上司の同意を得て名称をとりあえず《鉄製交椅》



図24

28 出品リストは『愛知県美術館年報 2002年度版』愛知県美術館、2004年、13-15頁。

29 牧野研一郎、古田浩俊、鯨井秀伸編『木村定三コレクション選』愛知県美術館、(財)愛知県文化振興事業団、2003年。内容：愛知県美術館長長谷川三郎「ごあいさつ」／牧野研一郎「木村定三コレクション覚書」／図版／木村定三「熊谷さんの芸術」(再録)／木村定三「長谷川利行の藝術」(再録)／木村定三氏著作目録／作家・作品解説／作品目録

30 受け入れ作業に関しては以下を参照のこと。村田真宏「基調報告 木村定三コレクションの寄贈から今日まで」、村田真宏、古田浩俊「受け入れ作業と登録業務」『木村定三コレクション研究報告書 1 2006』愛知県美術館、2007年、6-12頁、50-51頁。

31 調査結果は以下にまとめられている。『木村定三コレクション研究報告書3 2011 高麗鉄地金銀象嵌鏡架』愛知県美術館、2012年。

とした。受け入れ時には、用途が何なのかさっぱりわからない錆びた鉄の重い塊という認識でしかなかった。

2020（令和2）年8月に愛知県指定文化財に指定された《黒漆厨子》（M616、図25）は、7月17日に受け渡された³²。当日は厨子や机といった比較的大型の作品が中心だったので、搬出は倉から直接行なった。厨子はキャビネットの上にならずりと並んでいた。真黒で魅力があると思えない厨子をどうしてこんなに集めたのだろうかというのが、立ち並ぶ厨子を見た時の正直な感想であった。厨子の中には小さな仏像などが納められているものが多かった。受け入れ時に撮影した写真を元に、どの厨子に何が入っていたのかをリストにしてみたが、その関係性についてはよくわからない（表1）。中には、小さな水瓶が入っているものもあり、仏壇のような印象をもった。先述した木村氏の言葉を考慮すると、亡くなった身内の供養という側面があったのではないかと想像してしまうが、これは筆者の勝手な想像に過ぎないのかもしれない。さて、当該の《黒漆厨子》については、中に絵が描いてあったためなのか中には何も納められてはいなかった。



図25

11月20日に美保子夫人からの美術作品の寄贈について記者発表がされた。2,895点、評価額総額約36億5千万円の内容。翌日の中日新聞には、『富嶽列松図』の図版とともに「総額54億円相当に 故木村定三氏コレクション 重文含む2895点 妻が『遺志』継ぎ愛知県美術館へ」の見出しで取り上げられた³³。

短期間に大量の作品を受け入れたわけだが、受け入れ側にはいくつかの大きな問題があった。ひとつは虫菌害対策である。個人宅の倉の中に長年保管されてきた作品がほとんどなので、それらをそのまま収蔵庫に入れるわけにはいかなかった。2002（平成14）年12月、2003（平成15）年5月、7月、8月に作品を台車に乗せたまま一カ所に纏めて被覆燻蒸を行うことでこの問題はひとまず解決された³⁴。

二つ目の問題は、収納の問題である。もともと2000件足らずの所蔵品を持っていた美術館にその倍以上の作品が入ってきたのである。そもそも収蔵庫にゆとりがあったわけではなく、慢性的にはほぼ飽和状態が続いていた。幸運だったのは、木村氏が倉で使われていたスチール製のキャビネット24棟をいただいたことである。作品を預かりに行ったある時、がらんとした倉の中にキャビネットだけが残っている情景を見て、美保子夫人にこのキャビネットはどうするのかとお尋ねすると廃棄するとのこと。美術館で使いたいからくださいとお願いしたところご快諾いただいた³⁵。作品は基本的にライトバンの公用車で運

32 8月7日付「工芸品 第133号 黒漆厨子 千体観音図貼付 一基」として指定。これに先立つ調査結果は以下にまとめられている。『愛知県美術館研究紀要 第25号 木村定三コレクション編』愛知県美術館、2019年。

33 朝日新聞の朝刊の見出しは「ど〜んと36億円分、重文も 収集家遺族が寄贈 愛知県美術館生前分足すと所蔵の半数に」。

34 燻蒸に関しては以下に報告されている。長屋業津子、池田素子、志水明子「保存処置について」『木村定三コレクション研究報告書1 2006』愛知県美術館、2007年、63-64頁。

35 確認したわけではないが、この時美保子夫人は美術館がキャビネットを買うくらいのお金もないということに驚かれたと思う。このことが、後に夫人から寄附金を頂戴するようになる遠因のひとつになったのではなからうかと筆者は推測している。

厨子				収納物			
M番号	題名	画像	備考	M番号	題名	画像	備考
596	黒漆厨子		『仏教美術』94	595	男神立像		『仏教美術』33
599	黒漆厨子		『仏教美術』93	597 598	如来坐像 光背及び台座		
601	厨子			600	大日如来坐像		
603	厨子			602	道教三尊像		『作品目録』7 『仏教美術』26 水瓶3個
607	黒漆厨子		『仏教美術』95	604	如来立像		『仏教美術』22
				605 606	如来立像 埴仏		『仏教美術』16 (埴仏)
608	黒漆厨子		『仏教美術』97				厨子内に六角の台座
610	黒漆厨子		仏教美術96	609	仏坐像		
612	厨子			611	弥勒菩薩像		
614	厨子			613	多宝塔		
616	黒漆厨子		『仏教美術』92	なし	黒漆厨子		『仏教美術』92

『仏教美術 木村定三コレクション』愛知県美術館、2013年

『作品目録』：『木村定三コレクション 作品目録Ⅰ』愛知県美術館、2012年

んでいたのだが、キャビネットはさすがにそうはゆかず、業者にお願いをした。この時いただいたキャビネットは現在も収納に活用されている。

木村定三記念室

作品の受け渡し作業がある一方で、4月からは所蔵作品展示室の一室を木村定三記念室としてコレクションの常時公開を始め³⁶、初回は熊谷守一20点を展示した。その後は須田剋太、小川芋銭、長谷川利行・香月泰男と、木村定三氏からの寄贈品を中心に、美術館の守備範囲である近代美術の展示から無難に始めていった。

美術館における新たな局面として、4月から日本近世美術を専門とする学芸員が初めて採用されたことである。これは近現代美術の枠を超えた木村定三コレクションが美術館に収蔵されたことに対応したものであった。蕪村・玉堂の重要文化財を所蔵しながら、その時代を専門にする学芸員がいないのは、美術館として問題だと考えたのであろう。人が入れ替わったり、断続的であったりとするものの、この分野を専門とする学芸員の枠は今なお確保されている。

2004（平成16）年

熊谷守一展

一方で、木村定三コレクションをさらに広く知ってもらうことを目的に、企画展での紹介も始められ、2004（平成16）年10月から「木村定三コレクションによる 熊谷守一展」を開催した³⁷。木村氏と熊谷との長きにわたる関係を思えば、当然企画展として最初に取り上げるべき作家であった。この展覧会では、木村定三氏本人からご寄贈いただいた作品と美保子夫人からご寄贈いただいた作品のほぼすべて220点（展示替え36点）により、木村氏の熊谷守一コレクションのまさに全貌を初めて公開した³⁸。

なお、この展覧会の前に外部の専門家により《石亀》(KT100)が保存修復されており、これは木村定三コレクションを外部の専門家によって修復してもらった最初の作品となった。

ついであるが、この展覧会は、翌2005（平成17）年と翌々年の2006（平成18）年に福島県立美術館と姫路市立美術館でも開催しており、これらは館外で木村氏のコレクションをまとめて紹介する最初の展覧会となった³⁹。

なお、「木村定三コレクションによる 熊谷守一展」にあわせて『熊谷守一 木村定三

36 「木村定三記念室」の開設とそこでのコレクションの公開は、長谷川館長や課長が木村氏と取り決めたことの一つであった。牧野、前掲覚書、同頁。

37 主催：愛知県美術館、日本経済新聞社、テレビ愛知／担当学芸員：古田浩俊、森美樹、高橋秀治

38 木村氏が生前に熊谷守一美術館に寄贈した《自画像》と最後の油彩画《アケ羽蝶》も同館から借用して出品した。

39 平瀬企画業務課長は、当時姫路市立美術館でこの展覧会の担当学芸員であった。

コレクション』を刊行した⁴⁰。この書籍には木村定三コレクションの熊谷守一作品目録が収録されており、その後刊行されていく分野別目録の先駆けとなった。

木村定三記念室から木村定三コレクション室へ

当初から木村定三記念室として使われていたのは展示室8であったが、2003（平成15）年度最後のコレクション展会期（2004年3月6日～28日）は全館所蔵作品展となり、木村定三コレクションは美保子夫人からの新収蔵作品を前室1、展示室3、展示室4で展示して、初めて展示室8を離れた。それまで木村定三コレクションは基本的に「木村定三記念室」で公開してきたが、「記念室」という名称はどちらかという個人を顕彰する意味が強いものなので、作品を展示する部屋の名称としては「コレクション室」の方がふさわしいのではないかという市川政憲館長の意見により、これを機に2004（平成16）年度から「木村定三コレクション室」という名称に変更した。

2005（平成17）年

自然をめぐる千年の旅

愛・地球博（愛知万博）を記念して開催した展覧会「自然をめぐる千年の旅」は、出品作全156点の内、国宝や重要文化財の指定品がその半分近くを占めるという稀に見る大掛かりな展覧会で、当然ながら木村定三コレクションの3件6点の重要文化財も出品した⁴¹。特筆すべきは、浦上玉堂の《山紅於染図》が川端康成旧蔵の国宝《凍雲篩雪図》と並べて展示されたことである。木村氏はどうして《凍雲篩雪図》が国宝で、《山紅於染図》が重文なのかとかねがね話していたという。そうした木村氏の思いを酌んでの展示であり、当然ながら木村氏には両作品が並んだところをご覧いただけなかったわけだが、木村氏とそのコレクションに関わってきた我々にとっては、木村氏の願いを叶えられたという満足感があった。もし木村氏がこの展示をご覧になることができたとしたら果たしてどう思われたであろうか。

なお、この展覧会の準備の段階で辻惟雄氏を委員長とする10数名の専門家たちによる委員会が組織されており、機会があるごとにさまざまな委員に木村定三コレクションを見ていただき所見をいただいた⁴²。

専門家の来館

特定の作品が愛知県美術館にあることを人伝に知ったさまざまな分野の専門家が、その

40 村田真宏、古田浩俊、森美樹、鎌田恵理子（求龍堂）、鹿山芳明編『熊谷守一 木村定三コレクション』愛知県美術館、2004年。内容：愛知県美術館「ごあいさつ」、牧野研一郎（愛知県美術館副館長）「木村定三コレクションの熊谷守一」、木村定三「熊谷さんの人間像」（再録）、図版、作品目録（油彩画、日本画、素描、書跡、彫刻、資料）、木村定三「熊谷さんの芸術」（再録）、年譜、文献目録、The Kimura Teizo Collection and Kumagai Morikazu。

41 会期：2005（平成17）年3月11日～5月8日、主催：財団法人2005年日本国際博覧会協会、愛知県、愛知県美術館、中日新聞社、NHK名古屋放送局、NHK中部ブレンズ、日本経済新聞社。図録編集：牧野研一郎、馬淵美帆、深山孝彰。木村定三コレクションからは、重文の他に与謝蕪村《紫陽花にほととぎす図》も出品した。

42 筆者が立ち会ったと記憶するのは、浅野秀剛氏、河野元昭氏、佐藤康弘氏、西岡康弘氏である。

特定の作品を見るために来館するようになる。筆者が対応した最も早い例としては、3月28日に考古学者で東京国立博物館名誉会員の西田守男氏が三角縁神獸鏡（《三角縁・日月日日・唐草文帯四神四獸鏡》M347）を見るために来館したことである⁴³。氏からは同範鏡が磐田市のお寺にあるなどという専門家ならではの情報を伺うことができた。

コレクションの貸し出し

木村定三コレクションの存在が知られるにつれ、展覧会への出品依頼が増えるようになっていく。作品を借りる側としては、個人がご所蔵している作品をお借りするよりも公立の美術館が所蔵している作品を借りる方がはるかに簡単である。とりわけ木村氏はコレクションの貸し出しに極めて慎重であったから、そう易々とはお借りすることはできなかった。そのコレクションを受け入れた美術館としては、木村氏のその慎重な姿勢を受け継ぎ、木村氏のご存命であったらこの依頼に対してどう回答するだろうかという点をかなり意識していた。何件かの借用依頼をお断りしていた中で最初に館外への貸し出しを行ったのは、2005（平成17）年4－5月に京都国立近代美術館で開催された「村上華岳展」であった⁴⁴。木村定三コレクションからは《仏立像》（M1889）、《青柿》（M1890）、《草と虫》（M1891）の3点を貸し出した。

続いて、5－6月に開催された「熊谷守一美術館20周年展」には油彩画と日本画それぞれ3点ずつを貸し出した。木村氏と熊谷守一との深い関係、娘の榎さんが館長の熊谷守一美術館との関係を思えば、この周年展に協力するのは当然であった。

美保子夫人の援助

木村定三氏亡き後も美保子夫人はコレクションのことを気にかけてくれていた。美術館がコレクションの寄贈を受けても、それを保管し、調査・研究し、展示するにはそれなりの経費が必要になるということをよくご理解されていたためである。そのため、夫人は2005（平成17）年度に木村定三コレクションのために美術館に多額の寄附をしてくださった。その後、木村定三コレクションに関わる保存・管理、調査・研究、普及事業は、すべてこの寄附金を使って推進されることになる。その後も寄付は2007（平成19）年度、2011（平成23）年度、2015（平成27）年度と断続的に行われ、美術館では現在、2029（令和11）年度までの中期計画を作成し、計画的に事業を進めているところである。

2006（平成18年）年

空気清浄機の導入と友の会のサポート

大量受け入れた作品は燻蒸によって虫菌害の対策はできたが、作品の付属品から発生

43 木村定三コレクションの写真撮影を委託していたカメラマンの伝手で、愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎氏も後にこの鏡を見るために来館している。また、翌年5月には名古屋大学大学院の神塚淑子教授が坂出祥伸関西大学名誉教授を連れ立って《道鏡三尊像》（M602）を見るために来館した。

44 その後、5-7月に富山県水墨美術館に巡回。

する塵埃については別の対策が必要であった。木村氏のコレクションのほとんどは倉の中に保管されていたため、塵や埃の付着が目立っていた。美術館に搬入後に、採寸したり写真を撮影したりする基礎調査のためには箱から作品を出さねばならず、多くの箱は風呂敷に包まれていた。基礎調査は主に撮影室で行っていたが、塵埃の人体への影響を懸念した保存担当学芸員は空中浮遊塵の調査を行った。その結果を受けて消耗品として白衣、帽子、マスクを購入し、2006年3月に高性能の集塵効率をもつ（ $0.3\mu\text{m}$ 粒子にて99.99%以上）空気清浄機2台を購入した⁴⁵。

清浄機の導入により安心して作業ができるようになったが、風呂敷から出る塵埃についての根本的な解決にはならなかった。塵埃は払えばある程度は落ちるとはいえ、洗濯するのが一番きれいになる方法である。ところが木村氏の風呂敷の隅には三角形の白い布が縫い付けてあり、そこに木村氏は筆で文字を書いたり印を押したりしていたため、まるごと洗濯するわけにはいかなかった。そこで「愛知県美術館友の会」の展示・収納用備品製作サポート部会の方々に、風呂敷を解体して三角の布を外し、洗濯し、三角の布を再び縫い付けて復元するというたいへんな根気と手間のかかる作業をやっていただいた⁴⁶。これにより現在も安心して開梱作業ができています⁴⁷。

江戸絵画

2006（平成18年）年3月から2番目の企画展として「木村定三コレクションの江戸絵画－小世界を愉しむ－」を開催した⁴⁸。木村定三コレクションの江戸絵画は、蕪村・玉堂の3件6点の重要文化財を中心として、重要なかたまりのひとつである。展示作品の中には若冲や蕭白といったいわゆる奇想の画家の作品をはじめ、歌川豊春による大幅の肉筆浮世絵までも含んでいた⁴⁹。特色ある文化圏を形成していた地域別（江戸とその周辺、上方、名古屋、博多）に章を構成した。

この時も、熊谷守一展と同様に展覧会に合せて『江戸絵画 木村定三コレクション』を刊行した⁵⁰。木村定三コレクションの江戸絵画全体について、小林忠氏はその巻頭文の中で「良き町の、古き豊かな家の、趣味と教養のある人による、居ずまい正しいコレクション」と述べている⁵¹。

45 AIRTECH クリーンパーテーションACP-8957

46 長屋菜津子、池田素子、志水明子編、前掲書、64-65頁。

47 愛知県美術館では全所蔵作品を8分類して1年1分野ごとに箱などから作品を出して管理状況の確認を行っており、本年度は木村定三コレクションのうちで「水彩・素描」「版画」「油彩画」「日本画・書」「彫刻・立体・写真・インスタレーション・映像」「寄託作品」以外の作品を確認しているところだが、受け入れ時の状態を知っている筆者は、洗浄された風呂敷包みを解くたびに、サポート部会の方々のご尽力に頭が下がる思いである。

48 主催：愛知県美術館、日本経済新聞社、テレビ愛知／担当学芸員：馬淵美帆、深山孝彰、村田真宏

49 お預かりするために木村家でこの作品（軸装）を初めて広げたときには剥落がひどく、軸を巻いたり広げたりすることが憚られるような状態であったが、展覧会前に修復（剥落止め、表具のし直し、太巻など）を行った。

50 馬淵美帆、深山孝彰編『江戸絵画 木村定三コレクション』愛知県美術館、2006年。内容：小林忠「木村定三コレクションの江戸絵画」、図版（江戸とその周辺、名古屋、上方、博多）、作家・作品解説、掲載作品目録、Painting of the Edo Period from the KIMURA TEIZO Collection, List of Plates。

51 前掲書、12頁。

茶陶

素材で分類すると、木村定三コレクションのおよそ3分の1は陶磁器である。愛知県美術館の兄弟館に愛知県陶磁資料館（現陶磁美術館）があり、そこの学芸員にはコレクションの寄贈受け入れ当初から調査などで協力していただいていた。江戸絵画展がまだ開催中であった4月から、その陶磁資料館で「特別企画展 愛知県美術館所蔵 木村定三コレクションの茶陶」展を開催した。この展覧会では、古陶磁から現代陶芸までにわたる幅広い陶磁器作品の中から、茶陶に関連する作品を中心に紹介した⁵²。

そしてその展覧会図録が陶磁資料館から発行され、同じ内容で愛知県美術館は『茶陶 木村定三コレクション』を刊行した⁵³。木村定三コレクションの茶陶（陶磁コレクション）については、仲野泰裕氏が巻頭文で概観しているので以下に要約する。陶磁コレクションは、茶会を開くことを強く意識した収集である。それらは歴史陶磁と現代陶芸の二つに分けることができ、歴史陶磁の多くは茶道具で、桃山陶では美濃の志野や織部などが核となり、唐津、萩、信楽などが続き、備前は伊部手が多い。桃山期では長治郎焼の黒茶碗が際立っている。朝鮮陶磁には各種の高麗茶碗が多く含まれるのが特徴である。中国陶磁では青磁や古染付などが多く含まれている。その他ベトナム、クメールなどの東南アジアや、デルフトなどのヨーロッパのものも含まれる。江戸時代の作品では太田垣連月が多く、野々村仁清、青木木米なども数点含まれるほかは、生産地、年代など大きな偏りはない。「流芳五十」の赤茶碗が2点ある⁵⁴ことなどからも6世覚々斎宗左（原叟）に対して木村氏が格別のこだわりをもっていたことがうかがえる。現代陶芸についても茶道具の比率が高く、井上萬二など人間国宝の作家の作品もあるほか、今井康人（37点）、岩田安弘（24点）、上田恒次（35点）などが多いが、50点の小山富士夫（古山子）は充実した作品構成である。また、加藤孝一のテラコッタは105点と数も多い。

重要文化財の貸し出し

木村定三コレクションの貸し出しには特段の注意を払ってきたが、2006（平成18）年9-10月に岡山県立美術館で開催された「浦上玉堂」展に、《山紅於染図》をはじめとする2件5点の重要文化財（図9、10）をはじめて館外に貸し出した⁵⁵。玉堂の出身地での大規模な個展ということで、出品協力して然るべき展覧会であった。

52 主催：愛知県陶磁資料館、愛知県美術館、日本経済新聞社、テレビ愛知

53 愛知県陶磁資料館学芸部学芸課編『特別企画展 愛知県美術館所蔵 木村定三コレクションの茶陶』愛知県陶磁資料館、2006年／同編『茶陶 木村定三コレクション』愛知県美術館、2006年。内容：愛知県陶磁資料館・愛知県美術館「ごあいさつ」、仲野泰裕（学芸部長兼学芸課長）「木村定三コレクションの茶陶」、図版（古陶磁、現代陶芸）、作品解説、掲載作品目録、参考資料（日本陶磁基本用語解説、東アジア年表、東アジア全図、日本主要窯址分布図）、Message、List of Plates。

54 筆者はその可能性を愛知県陶磁資料館の神崎かず子氏から指摘され、氏の紹介する大阪の茶道具商に、氏に同行してもらい持参した現物を見てもらった結果、「流芳五十」であることが確認された。

55 11-12月に千葉市美術館に巡回。

公開シンポジウム

2006（平成18）年11月に美術史学会、文化財保存修復学会、愛知県博物館協会の後援のもと、公開シンポジウム「作品をまもり、伝える美術館—ある仏画（木村定三コレクション）の修復をめぐる」を開催した。その目的は「寄贈が決まってから今日まで、木村定三コレクションに美術館がどのように取り組み、何を行ってきたのか、その報告を通して、外からはうかがい知ることのできない美術館の、日常的にして基礎的な調査活動を知っていただくこと」にあった⁵⁶。たくさんの作品を寄贈してもらいながら、どうして一部の作品しか公開しないのかという問いやお叱りに対し、修復のための調査を終えた軸装の《愛染明王像》（M2116、図26）の修復方針を具体化させていく過程をシンポジウムというかたちで公開することを通じて、その理由を理解してもらおうのが狙いであった。



図26

ビデオ、リーフレット、鑑賞カード

シンポジウムと前後する時期に、筆者が担当して木村定三コレクションに関する最初のビデオ番組「木村定三コレクション—感銘を求める旅—」を制作した。改修工事後にプラス・キューブという名称で多目的に使われるようになったかつてのビデオテークや芸術文化センター地下2階のモニターで流すために製作されたもので、コレクションの全体像を17分で紹介した。ビデオ番組については、担当者が代わっても制作はその後2013年まで続けられた⁵⁷。

来館者が自由に持ち帰ることができるA4変形観音四つ折のリーフレット「木村定三コレクション」の制作も行った。このリーフレットでは、コレクションの概要や特徴が理解できるような包括的な内容とした。最初のリーフレットということもあり、作品の選定、原稿執筆、レイアウトに至るまでほとんどの部分を筆者が行った。木村定三コレクション関係のリーフレットはその後同じフォーマットで作られ続け、現在15種を数える⁵⁸。

同じく来館者用のA5版の鑑賞カードも作り始め、この年度には15種を制作した⁵⁹。その後も継続して作り続けている。

56 市川政憲「木村定三コレクションが愛知県美術館に残したもの」『木村定三コレクション研究報告書1』愛知県美術館、2007年、2頁。
57 「木村定三コレクションⅢ—江戸絵画への誘い—」2007年、「木村定三コレクション 近代の美術」2008年、「木村定三コレクションⅤ—近現代版画—」2009年、「木村定三コレクション—熊谷守一—画家として友として—」2010年、「コレクションをまもり伝える美術館—作品の修復と保存—」2012年、「木村コレクション『鏡』」2013年。
58 近代の南画、復古大和絵、近世禅画、名古屋の文人画、扇面画、蕪村と玉堂、山本梅逸と青木蒲堂、小川芋銭、森田恒友と岸田劉生、平福百穂、香月泰男、熊谷守一、須田刻太、浜田知明。
59 与謝蕪村《富嶽列松図》、浦上玉堂《山紅於染図》、同《秋色半分図》、伊藤若冲《六歌仙図》、小川芋銭《若葉に蒸さるる木霊》、長谷川利行《ノアノアの少女》、熊谷守一《土饅頭》、同《蒲公英に蝦蟇》、同《蝦蟆に蟻》、香月泰男《風船売り》、須田刻太《東大寺落慶供養》、《志野茶碗 銘 鵬》、《大井戸茶碗 銘 明の井戸》、《石造三尊仏龕像》、《四区袈裟禪文銅鐸》。

2007（平成19年）年

研究報告書

2007（平成19）年3月に最初の『木村定三コレクション研究報告書』を刊行し、上記シンポジウムの内容を報告した⁶⁰。その後、この研究報告書を断続的に刊行していくことになる⁶¹。

作品目録

同じ時に『木村定三コレクション作品目録 2006年度版 CD-ROM版』も刊行し、それを冊子化したものも数冊作成した⁶²。これらは図版を通じて木村定三コレクションの全貌を見渡すことのできる最初のものであった。

『國華』

12月、伝統と権威のある雑誌『國華』で「文人畫と南畫 木村定三コレクション（愛知県美術館）」の特輯がされた⁶³。「國華編輯委員会では、その中核とも言うべき江戸繪畫の中から、氏が愛して止まなかつた、そして同時に高い評價を廣く集める玉堂や蕪村、さらに名古屋ゆかりの中林竹洞や山本梅逸の筆になる文人畫七點を選び、特輯號を編むことに決した」という⁶⁴。これは木村氏の生前にはできなかつたであろう特輯であり、美術館に寄贈されて蕪村・玉堂をはじめとする木村定三コレクションの文人画・南画の全貌が明らかになったうえで、あらためてその近世繪画コレクションの素晴らしさが認められた証といえよう。

2008（平成20）年

名作展

2008（平成20）年1月から「木村定三コレクション名作展」を開催した（図27）⁶⁵。2003（平成15）年度の「時の贈りもの 木村定三コレクション」が木村定三氏本人からの寄贈品による展覧会であったのに対し、この展覧会は、その後に美保子夫人から寄贈を受けて木村定三氏のコレクションの全貌が見えたうえでの開催であった。第1章「古代の形象」ではメソポタミアの印章、古代中国の玉や青銅器、中国や日本の鏡などを、第2章「祈りの造

60 村田真宏、長屋菜津子、清水明子編『木村定三コレクション研究報告書1』愛知県美術館、2007年。

61 2号（2008年）、3号（2012年）。

62 愛知県美術館・美術課編『木村定三コレクション作品目録 2006年度版 CD-ROM版』『木村定三コレクション作品目録 2006年度版』愛知県美術館、2007年。目録をCD-ROM化する試みは、時流に則したものではあったが、専用ソフトをパソコンにダウンロードしないと使えないなどの難点もあった。

63 『國華』第1346号、2007年12月。國華編輯委員会（河野元昭）「文人畫と南畫 木村定三コレクション（愛知県美術館）特輯に當つて」、河野元昭「與謝蕪村筆 紫陽花にほととぎす圖」、前田麻衣子「建部凌岱筆 梅に叭々鳥圖」、守安取「浦上玉堂筆 閑日微陰圖」、朝日美砂子「中林竹洞筆 梅花書屋圖」、神谷浩「山本梅逸筆 蓬萊山水圖」、馬淵美帆「青木蒲堂筆 養老山眞景圖」。7点の掲載図版の内、カラーは與謝蕪村「紫陽花にほととぎす圖」、浦上玉堂「山紅於染圖」、中林竹洞「梅花書屋圖」、山本梅逸「蓬萊山水圖」の4点。

64 國華編輯委員会（河野元昭）、前掲、4頁。

65 全館所蔵作品展の一部として、企画展示室を使用して開催。

形」では中国の石仏、日本の仏像や密教法具、経筒、仏画などを、第3章では「仮面」を展示した。第4章では「近世絵画の諸相」を、第5章の「茶の湯の美術」では茶碗、釜、盆、香合などのほかに《織田信長宛上杉謙信書状》(M2013、図28)も紹介した。



図27

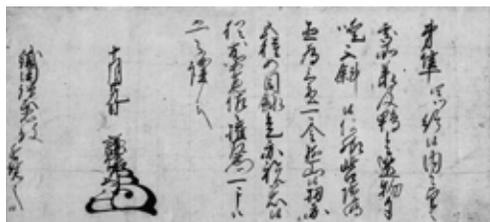


図28

第6章では蕪村、玉堂をはじめとする「南画の系譜」を、第7章では「熊谷守一とその周辺」として、熊谷の他に長谷川利行、須田剋太、香月泰男、上司海雲を、第8章では村上華岳、岸田劉生、前田青邨、土田麦僊、吉川靈華、西村五雲、福田平八郎の「近代日本画」を展示した。この展覧会は、木村コレクションの受贈後に継続的に行ってきた各分野の専門家等による調査の結果を踏まえたうえで構成されたものであり、このコレクションがもつ地理的・時間的な広がりをはじめて紹介する機会であった。

この展覧会に合せて『木村定三コレクション名作選』を刊行した。これは木村定三コレクションの代表的な作品を図版と解説で紹介した、木村定三コレクションに関する今なお最も包括的で本格的な書物である⁶⁶。

3月に「コレクター木村定三研究の基礎資料」と題して『木村定三コレクション研究報告書』の第2号を刊行した。序文で牧野館長が木村定三氏の蔵書受け入れの経緯と岸田劉生の日本画《清澄茂太郎図》について触れ、筆者が「鵬」をキーワードにこのコレクションを横断的に考察した。資料編では「木村定三氏関連著作目録」をはじめ、「茶会記録」のほか「蔵書目録」を掲載し、コレクター木村定三を研究するための基礎資料をはじめて公開するに至った⁶⁷。

66 鯨井秀伸、古田浩俊編『木村定三コレクション名作選』愛知県美術館、2008年。内容：木村定三「価値判断の物指」（再録）、愛知県美術館「ご挨拶」、牧野研一郎「木村定三コレクションの熊谷守一」、武田光一「木村定三コレクションの南画一与謝蕪村と浦上玉堂を中心に」、図版（絵画・書跡、彫刻・面、工芸、考古資料、近現代美術Ⅰ、近現代美術Ⅱ）、鯨井秀伸「『木村定三 私の書画遍歴 価値判断の物指』解題」、作品解説、作品目録、年表、List of Plates。ほとんどの解説は、調査に御協力いただいた方々によるものである。その意味では、コレクション研究の成果のひとつと位置づけることもできる。

67 高橋秀治、長屋菜津子、志水明子編『木村定三コレクション研究報告書 2 2007 コレクター木村定三研究の基礎資料』愛知県美術館、2008年。

2009（平成21）年

研究紀要

木村定三コレクションを学術的に研究した成果を発表する場として、3月に『木村定三コレクション研究紀要』を刊行した。その後この紀要は毎年度刊行され続けている。

おわりに

本稿でほとんど触れられなかったことに、初期の調査があるが、陶磁資料館はもとより名古屋市博物館の学芸員はじめ美術館・博物館関係者の方々、また民間の専門家の方々にもご協力いただいていることを記すだけにとどめておく。

筆者は生前の木村氏に何度もお目にかかっている。しかし、残念ながら面と向かって言葉交わしたことは一度もない。話をするのは常に上司で、筆者はその脇で話に耳を傾けていただけであった。何度もお会いして、上司にいつもついて来る筆者の顔も覚えてもらえなかなという時期になっても、やはり木村氏に話しかけるなどということは恐れ多くてできなかった。そうこうしているうちに木村氏の体調がすぐれなくなり、受け渡しの時にもお出ましにならなくなってしまった。今思えば、生前の木村氏にお会いし、間近でお話を聞けただけでも貴重な経験であった。

木村氏は自分の美術館を作ろうと思っていた時期もあったと聞いている。しかし美術館はコレクションだけあっても、それを運営していくためには人やお金が必要なことを木村氏はよく理解なさっていたという。そこで、愛知県美術館にコレクションを寄贈することで、愛知県美術館を日本一の美術館にするという気持ちもお持ちだったようようだ。日本一になれたかどうかは別にして、愛知県美術館に木村定三コレクションが加わったことで、美術館のありようがそれまでとは劇的に変化したことは確かである。現在、美保子夫人からの寄贈も合わせると木村定三コレクションは3,307件を数え、美術館の全コレクションの4割近くを占めている。筆者は木村定三コレクションの受入れに当初からかかわってきた学芸員でありながら、現役時代にはこの素晴らしいコレクションを十分に活用できなかったという悔いが残る。若い世代の学芸員がこのコレクションに少しでも興味持ち、コレクションを死蔵させないように上手に活用していってくれることを切に願っている。